

第 12 回アジア太平洋災害医学会議で発表しました(佐々木)(2014.9.17~9.18)

場所：東京ドームホテル

テーマ：「Ready for action! Are you ready?」

2014 年 9 月 17 日、18 日の両日、東京ドームホテルで第 12 回アジア太平洋災害医学会議（Asia-Pacific Conference on Disaster Medicine, APCDM）が開催されました（議長：日本医科大学多摩永山病院 二宮宣文先生）。APCDM はアジア太平洋各国の災害医療研究者により組織された学術会議で、国際的な視点で災害医療に関する意見交換を隔年で行う会議です。同日は日本、中国、韓国、タイ、インドネシア、トルコ、スイス、カナダ等から災害医療従事者・研究者が、また WHO や WFP 等の国連各機関、WADEM（世界災害救急医学会）、各国 NGO の代表者が集結し地震、津波、火山噴火、台風、洪水など巨大自然災害、またテロやマスギャザリングに対する医療・保健支援の経験を発表し、来るべき災害への準備・対応について討論しました。

佐々木宏之助教は 2013 年に行った医療機関の受援計画に関するアンケート調査結果を国際学会で初発表し、巨大災害時には医療需要が支援を大きく上回ることから、減災対策には支援側の強化のみならず支援の受け手「受援側」の強化が今後必要であろうことを伝え、国内外の参加者から多数の質問を受けました。受援計画アンケートでは、被災地域の医療機関から食料・水、医薬品の備蓄は少なくとも 1 週間分は必要であるという意見が多かったことについて、参加者から備蓄を増やすための財源をどうするか、保管スペースはどうするかなどといった具体的な質問がありました。また、海外特にトルコの災害医療従事者からは熱心な質問・発言があり、同じ地震大国として減災に対する新たな考え方であり同国においても是非考えたい、との意見を頂きました。

レセプションは東京ドームホテル 43 階の素晴らしい夜景の見えるレストランで開催され、国内外の関係者と飲食をともにしながら災害時の活動に最も有効な「顔の見える関係」作りに勤しみました。

文責：佐々木宏之（災害医療国際協力学）